慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペリーのイギリス最古の文明 : England and the world: essays arranged and edited, by F. S. Marvin, 1925. 8vo. Pp. 268. Londonとその一節
Sub Title	
Author	間崎, 万里(Masaki, Masato)
Publisher	三田史学会
Publication year	1929
Jtitle	史学 Vol.8, No.1 (1929. 3) ,p.103- 126
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19290300-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

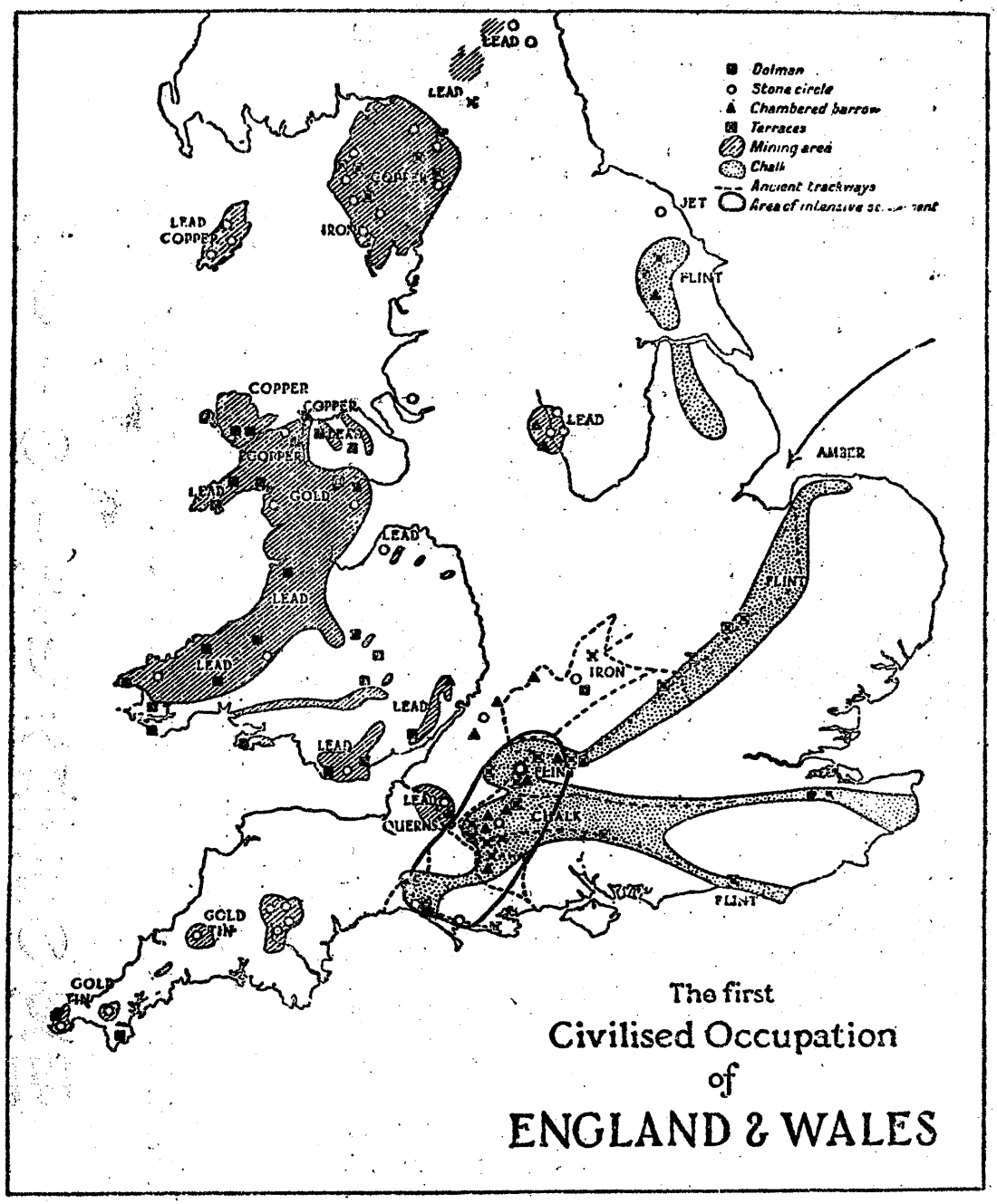
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ペリーのイギリス最古の文明

—England and the World: Essays arranged and edited, by F. S. Marvin, 1925. 8vo. Pp. 268. London とその一節—

F・S・マーヴイン氏の『統一と進歩』の方面から歴史を研究して世界の平和に貢献しようとするの企は、一九一四年八月一日—露獨の間に戰爭が宣言せられ、世界を歴史上最大の動亂に捲き込んだその日に、ジョルダンスに於て開かれたロンドン成人學校協會大會の席上に於て初めて論議せられ、それから生れた『統一歴史學校』の講座は、その第一回を翌一九一五年八月、バーミンガムの近くにフレンド協會の施設せる社會的教育的の居住地(セツトルメント)なるウッドブルークに於て開き、爾來略ぼ毎年(一九一七、八年中絶す)開催せられ來つたのであつて、それ等の講演集は、マーヴイン氏鑑輯の下に『統一叢書(ユニチー・シリーズ)』として刊行せられつゝある。一九一五年に發行せられたその第一輯『西洋文明の統一』(1)第二輯『進歩と歴史』、第三輯『晩近歐洲思想の發展』(その中の最近史學の發展に關する項目は『史學』第二卷第二號の拙稿の中に收む)、第四輯『世界平和の進展』、第五輯『西洋人種と世界』、第六輯『科學と文明』、を出し、その第三輯までは、四六版であつたのを、需要が多かつたので、爾後の版本と體裁を同じくするために、今はすべて菊判に改まつてゐる。

こゝに紹介しようとする第七輯は『イギリスと世界』と題し、一九二五年の復活祭の休暇にバーンマスに於て行はれた講演であつて、その前の部分にはW・J・ペリーのイギリス最古の文明、



R・G・コリンウッドのブリテンとローマ帝國、A・J・カーライルの中世、A・J・グラントの第十六世紀、第十七世紀、G・P・グーチの第十八世紀、第十九世紀を收め、他の諸輯と等しく專門家によつて、新研究を基礎とした平明自由なる歴史的概説が試みられ、その後の部分にはL・M・ペンソン嬢のイギリスと新世界の建設、H・ドッドウエルの東邦に於けるイギリス、F・S・マーヴインのイギリスと後進人種、イギリスと國際聯盟、

F・J・グールドの少年の國際主義への進路を收め、前の部分に說ける歷史から生じた實際問題の主要なる項目が自由に論述せられてゐる。

今左にその中の最も興味があり且つ異論の多いイギリス最古の文明の章を譯述しようと思ふ。その取扱へる時代は古いけれども、そは英國史中の最も新しい研究の概說だからである(2)。

一、文明協會の邦譯（大正八年發行）あり。

二、こゝに『イギリス』と記したのは『イングランド』の譯語である。以下倣之。また文明といふのは Civilization の譯語である。文化と文明は邦語としては文明開化の略語であつて上の二字をとるか上下兩端をとるかの差であつて略ぼ同一の意味に用ゐられてゐるけれども、その原語に於ては時に隨分八釜しく議論され乍らもその區別は著者により、またその用ゐる場所によつて一樣でないのであるが、こゝでは文明と譯するも文化と譯するも大差なき場合の用法である。

ブリテンに於て知られてゐる最古の文明は、ドルメン、環狀列石（ストーン・サークル）及び同種類の（世に謂ふ『巨石（メガリ）時代（ティック）の』）石造記念物建設者の文明である(1)。その當事者たる人々は突如イギリスに出現したのであつた。それ等の人々は地中海人種なので、彼等が地中海の方向から來たことが分る。彼等は今日知られてゐる世界最古の文明を作つたかの（西洋人としては）小さく、瘠形の、骨骼細く、毛髮濃く、目の薄黑い民族であつて、餘程古い世紀にイギリスに來たり、ウエールズ、スコットランド、アイルランドに於けると同じく、イギリスの諸處に定住し、その住所はイギリスとウエールズに於ては別圖に見る如く、主として或る地域に限られてゐた。例へば、彼等のイギリスに於ける植民は、遙か後に來たアングロ・サクソン人種の植民とは頗る違つた種類のものであつて、アングロ・サクソン人種は東部諸州の諸河の岸邊に定住したけれども、彼等は主として南部及び西部の高地に分布したのであつた。

彼等の文明は、大體に於て、イベリヤ、フランス、スカンヂナヴイヤの文明の連續であつて、この文明の後の階段に於て是等諸國と交通せる幾多の痕跡が、確に見られるのである。

例へばイギリスとフランスとイベリヤの諸團體（Communities）が巨石記念物を建設するの風習を

獨立に發明したものであるとは敢て主張するものの殆んど存しない位にその文化の類似は大きいのであつて、この類似は起源についての重要なる問題を提起するのであるが、それについては本章の終りに說くこととし、こゝでは、專らこの國の初期の占有の本質を及ぶ限り明かならしめるため、イギリスに集注することとしよう。

イギリスの初期の文明を取扱ふに際しては、イギリスの先史時代に於ける文明の諸階段を、『新石器』『青銅器』『鐵器』の諸時代に分つの習であるが本論に於ては、鐵器時代は不問に附して置いてよい。それは明かに後代の全く新しい文明に屬し、その文明は中央ヨーロッパからイギリスに來たものだからである(2)。我等はたゞ所謂新石器時代と青銅器時代との間に於ける區別を論ずればよいのである。

これは專ら考古學者にのみ興味のある事柄であると考へられてはならぬ。その反對に、西歐文明の問題を正しく理會するため、諸君は事件の眞相を注意することが肝要なのである。イギリスに於ける『新石器』時代の特色は所謂『長塚』(long barrow)の建設である。長塚は細長い土饅頭から成り通例東西に横はり、西端よりも東端が高まつてゐる。時としては、石造の通廊の附いた石造の墓室を含むことがある。この室は時には巨石なることもあれば、石の壁で出來てゐることもある。また之に到る通廊も同樣に二通りある。之に反して、長塚の中には全く石室を有しないものがある。イギリスに於ける所謂『青銅器時代』の特色は、通例石室のない圓塚の建設である。長塚に於て、さうしてまた初期の圓塚に於ても、死者は火葬とされなかつた。火葬の風習は青銅器時代の後の階段に於て到來したものだからである。更にまた長頭の民族は通例長塚に於て見出されるけれども、圓塚は圓頭の若干民族の墓地であり之に長頭の民族を加へてゐるのである。イギリスの二時代に於ける墳墓の間にはコントラストがある。圓塚時代には長頭の舊地中海民族の間に新人種の闖入があつた(3)。けれども、これにも拘らず兩階段を全く分離することは出來ない、この兩階段に於て環狀列石

が造られたからである。

この環狀列石は、イギリスの『新石器』時代と『青銅器』時代を結んで一體として次いで至れる鐵器時代と對照するのに役立つ。それ故に新石器及び青銅器時代は、單に同一文明の二階段と見え、或る目的のためには區別されるけれども、全く別物であると看做されてはならないのである。

イギリス最大なる二個の環狀列石は、十中八九まで、一つは初期の階段に於て、他は後の階段に於て造られたことを思つて、この二つの階段をば區別しつゝ、同時にその連續なることを知ることが出來る。私はエーヴエリー(Avebury)とストーンヘンヂ(Stonehenge)を指すのである。エーヴエリーは初期の民族、卽ち長塚建設者の作なることが一般に認められてゐるが、ストーンヘンヂも亦同じく確かにその死者を圓塚に埋めた人々の作れるものである。それ故私はイギリス初期の文明のエーヴエリーとストーンヘンヂなる二階段を說かう。斯くして私はこの文明は二階段を有することを示しつゝも、次に到れる鐵器時代と比較すればその本質に於て統一を有することを力說せる定義を採用しつゝある。

これからして、後者に於てのみ金屬が使用せられたことの推定に基いて、新石器時代と青銅器時代間の差別を立てる考慮が生ずる。この分類が初めてなされたのはスカンヂナヴィヤに於てゞあつた[4]。コペンハーゲン博物館主事トムゼンはその地方に於ける最古の墳墓には銅を含まず、次いで青銅の存する階段、最後に鐵の存する階段の到來せることに注目し、是等の階段をば『新石』『青銅』『鐵』時代と名附けたのである。この用語法は、人間社會に適用せられた當時の進化論と調和するものであつて、ヨーロッパの考古學全體に對しても應用せられた。そは今日に至るまで優勢であつたので、之を攻擊するのは無暴の行爲であるとされた程である。これは或る點まではよく效果を奏したことには同意しなければならぬけれども、それにも拘らず、この點に於てその後の使用は失敗に歸したのである。

金屬性の有無のみによつて分類の基礎を定むる

ことは極めて危險なのである。例へば、スカンヂナヴィヤに於ては、初期の墳墓に毫も金屬が見出されなかつたのは眞であるけれども、燧石製の器具と武器の或るものゝ形は、金屬の原型を摸して造つたことの明白なる證據を示す、別言すれば是等の器具と武器の形を最初に決定した民族は金屬を知つてゐたのである。

飜つてイギリスについて見るに、その死者を長塚の中に埋めたエーヴエリー時代の民族は銅も青銅も鐵もが是等の墳墓の中に見出されなかつたので、金以外の金屬を知らなかつたと說かれてゐる。この言は信じたいやうである。けれども私はこの論旨について故きやのん僧グリーンウエルの『ブリテンの墳墓』を引用したい。彼の言は極めて重要だからである。グリーンウエルは長塚がイギリス最古の墳墓であることを述べた後、次の如くに說いてゐる。『我等の有するすべての證據は、是等の墳墓の調査から得られた事實の大集積を形造るのであるが、そは是等が金屬を知らざる民族の墓地であることを極めて明確に示す、その故は、多量の石器は石室の若干に於て見出されたけれども青銅の、況んや鐵の器具は發見せられなかつたからである』(四八三頁)と。この說もまた大に信じたいやうである。けれども彼は後の頁に於て言つてゐる。『同時に私は何れか或る一組の墳墓の中に金屬の無いことは、それだけで是等を作つた人々がその(金屬)使用を知らなかつたことの證據でないことを十分に容認する、その故は、それ等(圓塚)に關係のあるその他の多くの事情からして、我等はそれ等(圓塚)が作られたとき、それ(金屬)が知られてゐたことを疑ひ得ないときに、金屬の何物をも含まない圓塚の數々を見出すことは稀なる事象ではないからである。しかるに、長塚の場合は全く異つてゐる、それ等の中に金屬の皆無であることは、一般的特色であつて例外的のものでないからである。さうしてそれ等の多くはこの事實を極めて大なる價値あるものとなすまでに十分よく調査せられた。金屬が知られてゐたとするならば、イギリスの諸所に於て非常なる注意を拂つて發掘せられた夥多の長塚の何れに於ても、それ

(金屬)が決して出現してはならぬことを信ずることは殆んど可能に思へない』(五四八頁)と。

これからして諸君は、恐らく結論するであらう、長塚は金屬の缺けたる副葬品(tomb furniture)を有したと、しかしこれは事實ではないのである。長塚はその建設者の文化階段を指示するに役立つものを含まないからである。『土器はまた殆んど用ゐられなかつた、兎に角、埋葬用には使用せられなかつたように見える。そは長塚に於てはたゞ極めて稀にしか出現せず、その出現せるときには、極めて偶然なる場合を除き、完器の形ではなく、單なる破片の形に於てゞある。之に反して、圓塚に於ては、破片としてのみならず完全なる器としてのそれが極めて普通である。』(五四九頁)

この記述はこの問題に全く違つた容姿を呈せしめる。長塚には銅は見出されないで、通例少數の燧石のみが見出される。故に何等かの理由により長塚の副葬品は圓塚のそれに比して極めて稀少であつたので、之に基いで何等確固たる結論を立てることは不可能である。

類似の墳墓を有する他の諸國について調査して見ると、イベリヤに住んでイギリスの長塚に相當する墳墓を作り、亦た同一人種でもあつた民族は銅を知つてゐたことが分る。その金屬の發見物が彼等の墳墓に於てなされたからである[15]。それ故にこの地中海人種の人々がイベリヤ或はフランスから、一層あり得べきは前者から、イギリスに來たときに、彼等は何等かの理由で、その墳墓の中に銅器を入れなかつた、實に上に見たる如く、彼等は事實上何物をも入れなかつたのである。さうでなければ、墓場荒(ツリーム・ロビング)しが昔し是等の墳墓からその副葬品を奪ひ去つたのであるかも知れぬ。記憶すべき要點はエーヴェリー時代の民族のそれと同一なる文明が、イベリヤに於ては、少なくとも銅の知識を有したことであつて、それ故エーヴェリー時代を、『新石器』時代と呼ぶことは、この用語が如何なる意味に用ゐられてゐるかが明かに理解せられてゐなければ、危險なのである。

この問題は西歐の文明を研究するのに頗る重要なので、私はこれについて若干時を費やして研究

したのである。銅がエジプトに於て、紀元前三三〇〇年より餘程以前に用ゐられたことはよく知られてゐる。この日附は、眞摯なる作家がイギリスの長塚に賦與せんと欲する日附よりも遙かに古いのである。更らに、エジプト及びクリートに於ける石造記念物の建設は、エジプトに於ける銅の製作よりも非常に後に始まつたのである。之に反して、イギリスの長塚から集められた證據は、それ等が銅の知識が得られる前に作られたのであつて、從つてイギリスに於ては石の築造は銅の使用に先立つことを暗示する。しかしイベリヤの類緣關係（アフィニチース）を念頭に置いて、長塚の建設者は地中海の方向から來たことを思へば、イベリヤの初期の墳墓の特色たる銅の使用は兎に角、イギリスへの推移行程中に消え失せたことが分る。この消失は說明を要するが、その行はれたことは疑はれないのである。故に私は、エーヴエリー時代の民族間に銅の使用されたことの問題は全く明かにされねばならぬことを認めよう。

マッシンガム氏は氏の未刊の書物『イギリスの出生』の中に、エーヴエリー時代のイギリスは中央集權の劃一文明であつたことを示すべき多くの證據を擧げてゐる。イギリスの諸所に獨立の部族が住んで相互間に若干の交通を維持したといふ思想は事實を說明することが出來ぬ。すべては占有の統一を暗示する。

先づ是等の初期に於けるイギリスの生活中心地なるエーヴエリーそのものとその近隣より說かんに[6]、この雄大なる記念物の意義と存在を知ることは、この國の初期の占有の本質を明白ならしめるに役立つに相違ない。その直徑約四分の一哩、廣さ二十九英町の面積を占める一村落を環狀に圍繞せる大なる土壘を考へて見よ。土壘の內側には壕がある。その一ヶ所に於ける私の測定によると、壕の底から土壘の頂點に至るまでの高さは八十呎である。土壘と壕は、曾て世界最大の環狀列石を有せる所のものを圍み、今日はその僅かに少數の遺石を存するのみであるけれども、是等はこの記念物の原形を窺はせる位大きいのである[7]。

この大記念物について心ゆく計りに記述するの

には多くの頁を費やすべきだが私はイギリス最古の最も綺麗な且つ威嚴のある首都であつたこの地に、未だ之を見たことのない人々に順禮するやう、勸誘することを以て滿足しなければならぬ。巡禮者は十分に報いられやう。その近隣に於ける歐洲最大の環狀列石は疑もなく同一民族によつて作られた、最大の高塚(tumulus)シルベリー墳丘(Silbury Hill)である。この大なる高塚は地面五英町半を蔽ひ、高さ百三十呎である。故にこの小なる地方には歐洲の最も堂々たる二個の古記念物があつて、それらは、遠く隔つた時代に於てイギリスのありたるべき所を英人に理解せしめる所のもので又確かに英人をして誇負せしむる所のものである。

これに止らず、シルベリーの視界内には巨石時代の傳統に從つて建設せられた長さ百ヤード以上の西ケネットの長塚があつて、これにはもと通廊に連結された堂々たる石造の墓室があつたに相違ないのである。

エーヴエリーの旅行は、イギリスのこの部分がそれ等の早き時代に於て、人口が稠密であつたに相違ないことを示す。それはその周邊の地は長塚時代と圓塚時代に於ける遺物に充ちてゐるからである。ヒピスレー・コックスの著はせる『イギリスの緑路(グリーン・ロード)』と『エーヴエリー案内』とはこれを極めて明かにしてゐる。例へば、氏の地圖は時に頗る大規模の、一連の土工を結び合はせた廣大なる行路網を示してゐる。さうしてこれは問題の時代の何れかの民族の作れるものなることは疑の餘地がない[8]。是等の行路はエーヴエリー周圍の地方を連結してゐるのみならず、この國のすべての部分に通達してゐる。

エーヴエリーはイギリスの中、確かにそれ等初期に最も人口の稠密であつた部分にある。ウイルト、ドーセットの二州は、長圓兩塚建設者の遺物に充ちてゐる。さうして丘岡の頂上に多くの土工があつて、すべては一つの廣大なる網に連結されてゐる。故に行路はメンヂプス山脈を横ぎつてソマセット州の海岸に通じ、この路線を經てウエールズへの往來が行はれたに相違ない。舊路リヂウエー線はデヴオン州アックス江からドーセット、

ウイルト、バーク諸州を至て、直路ノーフォーク州のウオッシュ灣へ通じ、他の路線は南丘原(the South Downs)を經てサセックスに通じてゐる。またドーセット州の海岸へ通ずる夥多の行路がある。一つの行路は北方コッウォルヅ山脈を經てオックスフォード州に入り、それより疑もなくイギリスの北部に通じた。四方八方に通ずる是等の行路はウイルトとドーセット二州の丘原地に輻まりその美麗なる草地を有して、當國の端から端へと是等路線に沿ふて起つたに相違のない交通範圍の永久の目擊者なのである。それ等舊時に於ける生活は全部ではなくとも主として丘岡の頂上に於て行はれ、特にウイルトとドーセット州の丘原に於てさうであつた。後代に至り、即ちサクソン時代よりして世人は流域に居住を始め、彼等がイギリスに渡來せるときの水路に執着して、之が定型をなすに至つたのであつて、その風習が更に變化し初めたのは漸く昨今のことである。是迄我等(英人)は數世紀間低地に住んだのであるが、今や別莊が山頂に點綴し初め、風致を損じつゝある。が、しかし、今や高地への慾望が復歸しつゝあつて、我等は是等の最も遠き祖先、即ち必要に迫られるのでなければ容易に之を去らなかつた位に高臺を愛好した黑くて小さい地中海人種の習慣に逆轉しつゝある。

是等路線の眞の機能は如何であつたかといふに地圖を瞥見すれば分る樣に、是等舊時の人々はコーンウオール、デヴオン、ドーセット、ウイルト、ダービー、ヨークその他の諸州の諸處に散在せる團體を形成して住んだのである。直に言ふであらう、彼等は互に通信の必要があつたと、之によつて路線網の必要が容易に分る。しかしエーヴエリーとシルベリーの宏大さを念頭に置き乍ら、地圖を十分によく研究すれば、これが全體であつて、諸部はすべて結ばれ、中央の焦點が西南の丘原地にあつたことを明かに思はせるのである。路線は西南に極めて豐富であつて、他の部分はさうでない。ドーセットとウイルト州には之が四通八達してゐるけれども、遠隔の地域に次第に減じてゐる。遺跡も亦之と同樣の關係にあつて、大體から言へ

ば、比較的大きくて一層堂々たる遺跡はこの國の遠隔の地方には見出されない。例へば、サセックス州には長塚があるけれども、それらは西南の長塚ほど大きくもなく、また石室を有しない。遠隔の地にあるものは萬事が小規模である。ダービー州最大の環狀列石なるアルバー丘(Arbor Low)はエーヴエリーの大さと雄大さに比較することは出來ぬ。國全體に劃一はあるけれども、集團の重心は西南の諸州にあつて、エーヴエリーを儀式の中心としたように見える。一體この雄大なる記念物、さうして又その附屬たるシルベリー丘に他の解釋が與へられるであらうか。この一點へ、儀式その他の集會に參與するために、八方から重要な民族が參集したに相違ない。さもなければその宏大なる容積は說明されないのである。後ちエーヴエリーが過去の事物となつたとき、同樣に、恐らく國全體の、儀式の中心地として用ゐるために、ストーンヘンヂが建設せられた。ストーンヘンヂの近隣には、エーヴエリーのそれと同じに、人口の大集中が行はれ、斯くして當時の人々に再びその大勢力を示したのである。

エーヴエリーとストーンヘンヂの兩階段に亙り斯くも長くイギリスを占有した理由は何であらうか。この長塚には副葬品が缺けてゐるので、初期の階段に關しては、當然多くを言ふことが出來ない。是等の民族はその墳墓に十分なる材料を殘すことを心掛けず、或は恐らく他の民族が之を盜み去つたので、その喪失からして後年如何に激しき論議が戰はされるかを思はなかつたのである。それは實際それ等の民族には面倒だつたのである。故に我等は殘されたる所のものを最善を盡して取扱はねばならぬ。しかしそれらの時代に於てすら、イギリス全部の間の交通があつたことは示される。

この交通の證據は是等民族がその家內工業のために用ゐた原料品の考慮から生ずる。エーヴエリー及びその他ウイルト、ドーセットの遺物はこの國の中燧石を含む白堊質の存する部分に分布してゐる。その時代には器具を作るのに燧石が大に用ゐられた。是等の民族はサセックス州のシスベリーとノーフオーク州のグリムス・グレーヴに宏大

なる燧石採取場と白堊質地方の諸處と時としては氷河の推進その他の構成中に燧石を存する他の場所にも數多の工場を有した。シスベリーに採取場を存することは彼等が採掘の知識を有したことを示すのであつて、之は頗る重要な事實である。この頃の燧石に關して興味のある點は、是等民族によりこれが使用される當國の他の部分に運搬せられたことである、燧石器はイギリスの全部に見出され、材料の原産地から遠隔の地にすらも存したので、一定の交通が行はれたことを證明する。

この初期の文明の特色は、世界の何處に於ても石器の製造に明かに二種の技術を存したことであつて、彼等は燧石と暗珪岩(チャート)を打裂したのみならずまた花崗岩、玄武岩、閃綠岩等の硬石を研磨して之から定型の石器を製造した。この二種の製法は極めて重要なる事實であつて、それは太古の人類がその武裝に加へて、之を世界の全部に運搬した新技術を有するに至つたある重要なる歴史的經驗を示すからである(9)。歐亞に於ける舊石器時代の人類は、その住所を選擇するのに、一部は燧石及び暗珪石の存在、インドの場合には石英岩の存在により、一部は洞穴の存在によつて、之を決定したようである。問題の文明は一歩進んで、新技術卽ち硬石を研磨するの術を加へた。

この新技術は人類の分布を複雜にするに役立つた。是等の新磨製石器は、燧石と同じに、この國の全部に運搬せられ、斯くしてまた交通の證據を加へる。燧石産出地方には硬質岩(hard-grained rocks)製の器具を有したけれども、硬質岩産出地方には燧石製の器具を有したのである。

以上の事實を說明するのに『物々交換』といふが如き平易な解釋を以て手取り早く片付けることは容易である。けれどもこれは危險なる推理である、特に我等が全國に劃一文明の傳播を論じつゝあるときに於てなほ更らである。それ等の時代に於ける當國の民族がその自然の資源を開發しつゝあつた、さうして、彼等は兩種の石器製造を行つて、彼等の必要とする所のものをば廣く遠方に求めたのであると主張することも等しく容易である。

しかし私はたゞ家内工業について言へるまでゞこの民族がそれ等の時代のイギリスに於てなしつつあつた處の中心問題には觸れなかつたのである。この問題を一層明かにするには、長塚の建設者がその後にその活動の證據を殘したことを思へばよい。金はキンマーリッヂ頁岩と共に、長塚の中に見出された。キンマーリッヂ頁岩は南ドーセット、卽ち人口の稠密なる地方から來たものであるから、そはこの地方と周圍の地方との間に於ける關係を殆んど示さないけれども、金は磨製石器具と等しく、丘原地方と他の地方間の交通を示すのである(10)。そは確かに交通の證據を與へるのである。しかし、この交通の本質は如何であつたらうか。不幸にして長塚からの證據は是れ以上に告ぐる所がない。我等はその資料をこの文明階段の後期に求めなくてはならぬ。圓塚よりは、金、琥珀、錫、銅、青銅、黑玉(ジェット)、頁岩の製品、竝に青土(blue paste)の連珠玉と星玉(Segmented and star-shaped beads)及びエーゲ特有とされてゐるものに意匠の類似せる裝飾を施したウォールヅ出の白堊製の『ドラム』(chalk drum)が出土してゐる。

是等出土品の分布は暗示に富む。金と琥珀の製品は主としてテムズ河南方の地方に限られてゐるからである。詳くいへば最大の占有地域にはこれが最も豐富なのである。故にこは南方の民族がその貨物を遠方の產物と交易したと信ずるよりも、寧ろ彼等は近隣の資源を開發しつゝあつたのだと推斷した方が、事實に最もよく符合するやうである。

環狀列石及びその他の巨石時代の記念物の分布から判斷すれば、西南の民族は當國の天然豐源を廣く開發しつゝあつた、隨つて開發地域はその富を奪はれたので、その眞の富を殆んど或は全く示さないのであると思はれる。例へばシュロップ州のミンスターレー近隣に環狀列石の存在せるは、たゞ私にはその巨石建設者の側に於て鉛鑛採掘の結果であると說明される。それはまたダービー州の環狀列石についても眞である。それ等建設物はその建設者の意志が殆んど疑はれない位鉛鑛採掘地方と密接な關係を有してゐる。また鉛がこの國

の青銅時代、卽ち環狀列石の建設時代の後期に於て、用ゐられたことが知られる。がしかし墳墓內の鉛の量は當工業の恐らく行はれたるべき範圍を表示し得る程には存しない。明かにこの時代には海外との交通が行はれたのである。

西南地方に琥珀の存することは海外との連絡の問題に關係がある。この物質はイギリスの東海岸からか、或は一層あり得べきは、スカンヂナヴィヤから來たのであつて、その地に於ては琥珀の採掘と現實に關聯せる同種の文明を存したからである。琥珀は、黑玉と等しく、古代に於ては、生命賦與の財寶と看做されてゐたので確かに珍重されたのである(11)。この二個の物質が目下研究中なる時期に於てスペインに入り込んだ。斯くして又諸國間に海上の廣汎なる連絡があつたことを示すのは意義あることである。

私はイギリスに於ける巨石記念物の分布は當國の天然資源、卽ち金、錫、銅、黑玉、鉛の採掘を暗示することを度々論じた(12)。この說に從へば是等物質は主として外國に送られたのである。黑玉の

場合には、當期のイベリヤの墳墓にこれが見出されたので、この點に疑を容れないのである。然らば、金、銅、錫、鉛その他の物質が當國から輸出せられたこと、さうして實に廣大なる採掘が行はれてゐたことを疑ふべき理由はあるまい。斯樣な交易は新地開發の歷史上に於て誰も知る所である。

イギリスの青銅器時代の民族が當國の錫、銅、金等について知り、明かに是等を探索してゐたことは確かであるけれども、長塚時代の民族が同樣の探索を試みてゐたといふ說には疑問が投ぜられる。がしかし、この見解を可とするためには、更に昔時是等の人々が作つたエーヴエリー、シルベリーと種々の土工の巨大なることが、高度の文化を大に立證するものであることを說かねばならぬ。是等の人々は單なる遊牧の民ではなく高度の文化を有せる民族であつた。のみならず、イギリスに地中海種族の民族の出現せるは彼等が英佛海峽を渡り得る位の巨船を有したことを示すのである。

長塚民族卽ちエトヴエリー期の人民の例は恐らく彼等の出でたるべきスペインとポルトガルの國國に就いて見るとき一層容易に諒解せられる。その地に於て、イギリスの長塚に相應する巨石時代の通廊式ドルメン(passage dolmens)の建設者が活潑に半島の資源卽ち銅、一種のトルコ玉、紫水晶、金、その他の物質の採掘を行つてゐたことが知られ、是等の品名は彼等がイギリスの長塚建設者としての同樣の活動を示すものである。更らに、イベリヤ竝にフランスに於ける巨石記念物の地理的分布はこの論點を明かにする。要するに、イベリヤとフランスの通廊式ドルメンの建設者竝にイギリスの長塚建設者の文明は當初から精巧なものであつたのみならず、イギリス、スカンヂナヴィヤ、フランス、イベリヤ間に活潑なる交通が行はれたる文明であつて、諸國は開發せられつゝ有つたのみならず西歐諸地間に自由なる交通が確立せられてゐた。

何れの民族であつても、自然その住國の資源を開發するのであつて、外部から學ぶ必要はない、更らに、時を經るにつれ、如何なる民族もその天産品を他國のそれと交易するに至り、斯くしてウイトビーの黑玉とバルチックの琥珀がイベリヤに存在せる理由が明となると說くであらう。これは確かに世界各地に於ける文明の後の階段に於て起りはしたが、精巧なる石器を製作するの風習を含み、完全なる文化が突如出現したる初期に於ては確かにさうでなかつたのである。スペインの民族が、その產物をウイトビーの黑玉と交換したこと(これは初期の文化が構成される仕方である)は主張されようけれども、諸國に於ける墳墓型式の一致はこの樣な說明を許さないのである。それらはどうしても民族が現實に移動したことを暗示する。長塚建設者はイギリスに來たのであつて、彼等は地中海人種であつた。彼等は察するところ、同樣の墳墓の作られたる處から來たに相違ない、さうしてこの樣な墳墓はフランスとイベリヤに存するのである。故にこの推定は移住を含むのであつて、貿易や交換ではない。のみならず、移民は開發を目的としたのであつて、食料品の缺乏(或

はその種の原因）に迫られて供給の新資料を求めんとしたのではない。

環狀列石の時代に西歐諸國間に交通のあつたことを知れば、この事實について如何に說明されようか。我等はこの活動を文明全體の發展の或る廣汎なる行程の一部であると信ずべきか將たこは西歐に自發的に發生したのであると信ずべきであらうか。オックスフォードのリーヅ氏によれば通廊式ドルメンの建設はポルトガルに始まり、その地から諸方に傳播したのであると[13]。氏は文化の自發的發展を信じて、地中海の東部及び西部諸國間の明白なる文化關係をすらも排斥するほどであつてその類似は『偶然的のものであつて、原始的文化の何れの系列間にも發生するが如きものである[14]』としてゐる。

西ヨーロッパの巨石時代の文明は東地中海から射出する廣汎なる文化圈內にある。恰もイギリスの長塚がフランスとイベリヤの通廊式ドルメンに直接連絡ある如く、後者はまた橫穴墳墓（rock-cut tomb）に連絡があるからである[16]。橫穴墳墓の製作は、爰に提唱せる見解に對して猛烈に反對せる人人によつてすら、巨石記念物の建設を以て特色とする文明の要素であることが承認せられてゐる。斯樣な墓はフランスとイベリヤに見出されるのみならず、イタリー、シシリー、クリート、キプロス、エジプトその他の場所にも存在する。後に擧げた國々に於ては通廊式ドルメンを存しない。これは或る研究者達をして餘儀なくそれ等と西地中海の間に於ける關係を拒み、西地中海の諸民族が通廊式ドルメンを發明したのであると主張せしめるに至つた。別言すれば、彼等は西歐は通廊式ドルメンを作つた民族が最後に東地中海のそれ等と構造の似寄つた橫穴墳墓を作るに至れる自然の歸趨（コンヴァージェンス）が生じたのであると假定する。彼等はあたかも地中海の東西間に於ける統一は、全く偶然的のものであつて、墳墓類型の進化の赴くべき歸結である[16]と論ずるやうである。この歸趨說はフランス、マジョリカ、クリート及びエジプトの橫穴墳墓の構造を比較して知られるように、或る驚くべき暗合を生じたのである。（私一人でも、獨立の發展に

基くものとは承認し難い）のみならず、横穴墳墓（さうしてこの横穴墳墓はリーヅ氏により『巨石時代の』と稱せられてゐる）金、琥珀、黑玉、硬玉、一種のトルコ玉から作られた物品を含み、著るしく東邦の影響、特にクリートのそれを含む。別言すれば、リーヅ氏は横穴墳墓を彼の系列の一端に置き、この民族はクリート島人の賞美せるものと同じ種類の物品の價値を知るに至つた[17]と論ずる。リーヅ氏の說は巨石時代の文明はポルトガルに始まりその地からして海路によりサルヂニヤ、シシリーその他に傳播したといふのである。これは更らに是等民族も亦海を渡つて之を運搬すべき船を自發的に發明したといふ今後出づべき說を含む樣である。

之に反して、すべての證據を念頭に置くならば正反對が西歐に起り、横穴墳墓はトルコ玉と紫水晶とその他の貴重品を賞美することと一緒に、東方から移入され、この外來文明が變化を來たすに至つたことを私は暗示する。その本土から他所への文化の推移は通例美術工藝の喪失となり、熟練と技術の減少を來たしたことが熟知せられる。故に私は横穴墳墓を作る風習は銅斧發明の結果生じたその發生地エジプトから傳播したときに、それは亡ぶるに至つたと主張する。それがイベリヤその他に到來したる際、この民族は岩石に墳墓を開鑿するの勞働に着手するまでに熟練しないので、一層容易なる通路により本質的に同一の結果を得た。彼等は第一に彼等の劃せる地面に壕を掘り、扁石を以て蔽ひ、最後に扁石の地面上の墳墓を作り、その上に土饅頭を積み上げた。この最後の階段に到達した時には、紫水晶とトルコ玉の元來の使用と外來勢力の他の徵候とは消滅して、最も新しい墳墓中の副葬品には殆んど變化がない位となつた。

私はこゝに今新說を提唱しつゝあるのではなく單に立派な考古學者によつて久しく支持せられてゐた說に更に大なる力を與へんとするのであることを一言しなければならぬ。横穴墳墓の製作、卽ち巨石文明全體の精神は東地中海から傳播したといふ見解はモンテリウス[18]ゾーフス・ミュラー[19]、デ

シュレット[10]その他によつて抱かれたのみならず、横穴墳墓は通廊式ドルメンの原型であつたといふ暗示はフランスの二大考古學者のこの記念物の起源に關する見解と調和するに役立つ。モルチエーは通廊式ドルメンは洞穴中に死者を置くの風習の結果として起り、次いで横穴墳墓となり、最後に通廊式ドルメンとなり地から外に出づるに至つたとく。デシュレットはこの見解を拒けた、その故は巨石時代の記念物を建設するの風習は東部から來たと說得せられてゐた[21]からである。しかしモルチエーの案の第一階段が放棄せられたならば、兩說は完全に調和する。

有效なる假設として通廊式ドルメンの建設は横穴墳墓の製作を東方から移入せる結果として西歐に發生したといふ見解を採用せしめよ。之より知るべきはこの文明の偉大なる外進運動に關してクリート及びエジプトについて更に何物かと學ばれ得るかどうか、殊に之に對して何等かの動機が認められるかである。

利用し得る證據は紀元前二〇〇〇年頃なるエジプトの中王國の時期を、クリートと西歐に見出されたそれらに類似せる横穴墳墓が一般的に使用せられるに至つたとき[22]であることを示す。さうであるならこの事實を巨石の建設者により西歐を占有せることと連絡すべき如何なる證據を有するであらうか。

この證據は存する。そは極めて重要なのである。何となれば、モンテリウスが二十五年前に示せる樣に、青銅の一般的使用は中王國の時期にエジプトに始まつたからである。そはクリートにも同じ頃に始まつた[23]。青銅は銅と或る他の金屬、この場合には錫の混合から成る。エジプトまたはクリートには錫を存しない。故に是等兩國はこの金屬を他所から得なければならなかつた。クリート人はその頃大航海民族であつて、彼等が遠方に貿易したることは承認せられてゐる。サー・アーサー・エヴアンズがその大著『ミノスの王宮』の中に言へる如く、彼等は西方に赴いた。『ミノアその他のエーゲ商人が西地中海邊に突進せるは確かに極めて硬き(?)商品を追及するにあつた[24]。』故に海路容

易に接近し得て、金は言はずもがな錫と銅に富める西歐の國々が、錫が兩國に於て一般的使用を來たしつゝあつたその時機に、クリートとエジプトの不可思議にも暗示的なる文化を有せる民族の人口を突然受容したのは、偶然の機會であるか或は斯樣な交通のあるものゝ結果であらうか。私にはこの問題には唯だ一つの可能なる說があるように見える、そは卽ち東地中海の民族は、恰もフエニキヤ人、カルタゴ人、ローマ人がその後になしたる如くに、西方の資源を開發しつゝあつたといふのである。彼等は鑛業的遠征のため是等の國に赴きつゝあつた、さうして彼等はその本國に作つた如き墳墓をその地に作りつゝあつた。この結論はH・W・ホーウイー氏の示せる如く(25)、北スペインのガリチヤに巨石記念物の分布が錫と金の分布と密に一致せるに於て、一層有力となる。實にイベリヤの一般圖は巨石記念物の分布と鉛その他については言ふまでもなく、錫、金、銅の古代の採掘と密に一致せることを示してゐる。

私の提案せる解決はすべての要件を充たし、何れの證據にも背かない。この外來文明の突然の出現と分布は說明せられた。また西漸運動の動機は與へられた、そは卽ちその時に明確なる價値を得てゐた原料品の搜索是である。これらの物質はこの勢力の出所であると私の想像する地に於て現實に使用せられてゐたからである。

そこには一つの困難がある。そは卽ちイベリヤ、フランス、その他に、初期の記念碑を作つた民族は錫、或は銅をその墳墓に殘さなかつたことである。そは行程の本質によつて說明せられる。外國に働きつゝあつた坑夫は地方の用に宛つるためではなく、通例輸出用の鑛石を得つゝあつた。彼等自からの用に宛つるためには、疎製石器で足りた。彼等は鑛石を東方に、クリートとエジプトに積出し、その地に於てそれ等の大文明の用に使用せられた。既に指摘した樣に、墳墓の中に金屬なしとの想像から餘りに多くを推論することは危險である。所謂銅器時代のイタリーに於ける橫穴墳墓の中に錫の釧が見出されたからである(26)。これは、是等民族が現實に錫を知つてゐて、それは使用せら

れたるも、墳墓の中に入れることは稀であつたことの證據である。

ブリテンに於ける巨石記念物の分布をよく説明するものはこの様なる推理の仕方である。何となれば、私が既に示したやうに、是等記念物の分布は金、錫、鉛、その他の物質の産地と頗るよく一致してゐるので、その建設者の意向について殆んど正當なる疑が容れられないのである。彼等は海へ導ける通路によつて、之を輸出することに、主として從事してゐたことが假定されれば、この事實の十分なる説明となるのである。この採掘説はまた青銅器時代に於てイギリスに鉛の比較的缺乏せしことの説明ともなる。鉛は確かに使用せられたるも、メンヂップ山脈とダービー州の地域に於ける遺物によつて暗示せらるゝ程度の兩所の採掘を説明し得るほどの分量ではなかつたのである(27)、しかし、もし鉛は、鉛その者については言ふ迄もなく、銀をクリート人とエジプト人に供給するため、輸出用に宛てられたと假定すればその比較的稀少なることは容易に首肯されるのである。

目下のところ、イギリスのエーヴエリー時代についてのすべての證據を説明するに足る何等有效なる假設を組立てることは不可能である、そは數個の重大なる困難に出遭ふからである。しかし私は私が上に述べたる處のものが、是迄暗示せられた何れの説よりもよく批判の稽査に堪へ得るものと信ずる。何となれば、そは事實の大部分を説明するからである。私はこの文明のイギリスに出現せることは、その以前でなくとも、エジプトの第十二王朝に開始せられた行程の一部であつたと信ずる。がしかし、この勢力がイギリスに直接に達したのであるか將たイベリヤを經て間接に及んだのであるかについては、未だ解決し得るやうには見えない問題なのである。イギリスへの運動が西歐、恐らくスペイン或はポルトガルから來たのであつて、直接に來たのでないことは證據の暗示する所である。さもなければ、直接東方の影響を暗示する物品が今日まで存しないことは説明されないからである。別言すれば、最初の遠心運動はその進むに從つて、一層分布するに至れるものと認

められねばならぬ。

一組の移住者がイギリスにエーヴエリーと關係せる文化階段を移入し、遙かに後の集團がストーンヘンヂの當事者であつたことは既に指摘して置いた。私は前者を、第十二王朝時代のエジプトに發し、クリートを經て西漸した影響に敍及して置いた。ストーンヘンヂのそれなる第二期の間に於ける外的關係については何が知られてゐるか。

青銅時代に於けるイギリスはクリート及びエジプトから射出する文化の間接影響を受けた。その故は、イギリス南部の墳墓の中に、初めてエジプト人によつて作られた型式に從つて、或る者は連珠形の他のものは星形の青土製の玉が見出されたからである。連珠型はクリートに用ゐられたるも、星型はさうでない、少なくともそは未だ見出されない、がしかしクリート人がその西方への傳播の任に當つたことはあり得る。連珠玉が輸入されたのであるにしろエジプトの原型に摸して地方的に作られたのであつても、分布の證據は等しく歴然たるものがある。連珠玉の使用は第十八、十九王朝期のエジプトに普及してゐた故に、之が第十七王朝より後に、スペインその他に到達したのであると推定しなければならぬ。サー・アーサー・エヴアンズはその日附を前一六〇〇年と前一二〇〇年の間に置いてゐる。

以上はストーンヘンヂ時代のイギリスに及ぼせる東方影響の證據を盡さない。そはマールボロー附近のマントンに於て、金の枠に入れた琥珀の圓盤が見出されたからである。『そは薄い金の枠に入れた赤琥珀である。金は極めて見事に規則正しく引かれた六個の同心放射線を以て裝飾が施してあつて、その線上には同じ間隔を置いて、小さい數個の刻印(Pumel-mark)がある。この圓盤は兩面が同一であつて、金は別個の二片よりなり、緣の周圍を巧に合してあるからである。』これはカニントン夫人により、クリート島クノソスの横穴墳墓の中に見出された前約一五〇〇—一四〇〇年頃の、別言すれば、青土連珠玉の西方に運搬せられた頃に發する同樣の圓盤と比較せられた。『クノソス出土の金と琥珀で出來た圓盤はマントンのそれと

同じ大さであつて、金の緣が平面に見える點を除けば殆んど同一である[28]。』この證據は、連珠玉からまたウォールヅの白堊製の『ドラム』からの證據と併せて、エジプトの第十八王朝に相當する前一五〇〇年頃なる靑銅器時期に於けるクリートからの大影響を盛に暗示するものである。

故にイギリスの初期文明の二大階段は主としてその精神を第十二と第十八王朝のエジプトに仰いだことを證據が暗示する。是等兩期はエジプトに外的活動の大增加を來たせると、クリート文明の新噴出と一致し、兩國に於けるこの二期は擾亂期の終末を劃する。クリートが斯くしてエジプトと歩調を揃へたることは、少なく言つても、意義あることで、この事實は、發明に於てはエジプトを先達として、兩國間の親密なる關係を示すのである。エジプトがクリートの精神を動かせたとすれば、クリートが次いで、西歐の國々の精神を動させない理由があらうか。エジプトの影響の結果としてゞなくては、クリート文明の進歩を見出すことは不可能である。この點はサー・アーサー・エヴアンズがその著『ミノスの王宮』の中に常住主張せる所である。それ故、ポルトガルの如き後進國が西歐に廣く傳播し、最後に東地中海のクリート及び他所のそれに驚く計り類似せる墳墓の型式を發展させた新文明の發祥地たることがあり得るだらうか。それより西歐の文明の大時期に對して責任があるのは第十二と第十八王朝にエジプトに始まりたる行程であつたと信ずる方が遙かに容易である。（一九二八、一二、一二日譯了）

註

一　是等記念物の記述については、T. E. Peet, *Rough Stone Monuments*. London, 1912. を見よ。こゝに文明といふのは、文化の『食糧製造』の階段をいふのであつて、『食糧採取』の階段から區別される。

暫く前に、著者の友人 H. J. Massingham 氏は、この章の題目に關して一書を執筆しつゝあつた。そは、私の知れる限りで、イギリス最古の文明を系統的に取扱つた最初の試みをなすものである。この興味ある主題の詳細なる記述は、同氏の *The Birth of England.* を見られたい。

二　この文化階段についての詳細は、大英博物館案内を見よ。

三 著者は長塚と圓塚間の關係について假設を立てようとするのではない。マッシンガム氏は、その著『イギリスの出生』の中に、この問題を論じてゐる。

四 これについては、本誌第七卷第二號大山柏氏の『デンマークに於ける貝塚構成時代』を見よ（譯者）

五 E. T. Leeds, *Archæologia*, lxx. 201 seq., 214–15, 222.

六 Hippisley Cox's *Guide to Avebury*. London, 1909. を見よ。

七 譯者が一九二六年九月十一日この地を訪れたときには、空中より撮影せる寫眞によつて、その全景が完全に知られるのであつた。その寫眞は實費六磅を要したものの由であるが、その複製を得ることを許されなかつたのは遺憾であつた。

八 また C. A. Smith, *Guide to the British and Roman Antiquities of the North Wiltshire Downs*, Marlborough, 1884. をも見よ。

九 この點の議論に關しては、Perry, *The Children of the Sun*, p. 457. を見よ。

一〇 事實上考古學者はみな、その時代の金はアイルランドから齎らされたと推斷してゐるのは變だ。西歐に於ては、イギリスにすらも、他のエル・ドラドスがあつたのである。

一一 黑玉については、*Archæologia* xliii, p. 517.

一二 *The Growth of Civilization*. Chapter IX. を見よ。

一三 'The Dolmens and Megalithic Tombs of Spain and Portugal' *Archæologia*, vol. lxx, p. 291 seq.

一四 *Cambridge Ancient History*, ii. 590.

一五 G. Elliot Smith, 'The Evolution of the Rock-cut Tomb and the Dolmen,' *Essays and Studies presented to William Ridgeway*. Cambridge, 1913.

一六 リーヅの前掲書、二二九頁を見よ。『證據は、その日附が單多角型の……それよりも先立てることを示し、そは通廊式を生じ、それよりして又……一面に於ては人工の洞窟、他面に於ては巨石時代の墳墓の全範圍が進展した。』合せて T. E. Peet and T. Ashby, *Cambridge Ancient History*, ii. 600–1. を見よ。兩氏は、横穴墳墓は殆んど專ら地中海に限られてゐる（そは事實でない）と述べた後、エジプト、キプロス、クリートのそれらと、その地方の他部のそれらとの比較をつゞけてゐる。エジプトとクリートとは、即ちスペインから學んだといふ思想を拒んだ後、反對の可能を論議し、『それ故、我等は後者がもつと進歩せる隣人、例へばエジプト人とクリート人の如きから横穴墳墓の用を學んだ（これに對しては何等證據を存しない）のであるか、さもなければ、更にあり得べきは彼等がこれを獨立して自から發展させたのであると想像しなければならぬ。』

一七 『共に恐らく半島の產物なるべきトルコ玉と紫水晶が東方の起源たることを要求しないので何等證明する所がない』といふ彼の言を見よ。*Liverpool Annals of Archæology and Anthropology*, ix, 1922. この點については、B. Laufer, No-

tes on Turquoise in the East. Field Museum of Nat ral History, Anthropological Series, vol. xiii, No. 1, Chicago, 1913. を見よ。

一八 O. Montelius, *Die Chronologie der ältesten Bronzezeit*, Brunswick.

一九 Sphus Müller, *L'Europe Préhistrique*, Paris.

二〇 J. Déchelette, *Manuel d'Archéologie celtique et gauloise*, Paris.

二一 前掲書第一卷四二二頁以下

二二 N. de G. Davies and Alan H. Gardiner, *The Tomb of Amenemhat*, 1915, p. 11. A. J. Evans, 'Prehistoric Tombs of Knossos', *Archaeologia*, LIX, 2. 1905, p. 558.

二三 S. Xanthoudides, *The Vaulted Tombs of Mesara*, 1924.

二四 Op. cit., p. 23. S. Xanthoudides, op. cit., p. 27.

二五 *Folk-lore*, 1925.

二六 A. J. Evans, *The Palace of Minos*, 101.

二七 J. Evans, *Ancient Bronze Implements of Great Britain*, 1881, p. 417. この時期の鉛釉の多數がクリメーニで發見せられた。

二八 *The Antiquities Journal*, 1925, p. 70.

參考書

前記の註の外、次の書籍を參照するべきである。

A. H. Allcroft, *Earthwork of England*. Pp. xii, 711. Macmillan, 1908.

G. Elliot Smith, *The Ancient Egyptians*, Pp. xvi, 187. Harpers, 1923.

T. Rice Holmes, *Ancient Britain and the Invasion of Julius Cæsar*. Pp. xvi, 764. Oxford, 1907.

L. Siret, *Questions de chronologie et d'ethnographie ibériques*, i. Paris, 1913.

B. C. Windle, *Remains of the Prehistoric Age in England*. Second edition. Pp. xvii, 332. Methuen, 1909.

間崎万里